



恐るべき預言

➤宗教改革は、16世紀に、聖書を人々に開いてみせ、ヨーロッパのあらゆる国々に入っていこうとした。ある国々では、それを天からの使者として喜んで迎えた。他の国々では、**法王権**（→現在では教皇権に統一）が、その侵入を防ぐのに大いに成功し、聖書の知識の光とその高尚な感化力は、全くといっていいほど締め出された。ある国では、光が入ったにもかかわらず、暗黒はそれを理解しなかった。何世紀もの間、真理と誤謬とは覇を競った。ついに悪が勝利し、天の真理は追い出された。「そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々は……光よりもやみの方を愛したことである」（ヨハネ3：19）。その国は、自ら選んだ道の結果を刈りとることになった。神の霊の抑制が、神の恵みの賜物を軽べつした国民から取り去られた。悪は、成熟するままにされた。全世界は、故意に光を拒むことの結果を見た。

➤フランスで幾世紀も続いた、聖書に対する闘争は、ついに革命へと発展した。この恐ろしいできごとは、ローマが聖書を圧迫した当然の結果にほかならなかった。革命は、世界がローマの政策の成り行きについて目撃したところの、最も著しい例であった。それは、ローマ教会が1000年以上にわたって教えてきたことの結果の実例であった。

➤法王至上権時代における聖書の禁止については、預言者たちによって預言されていた。また、黙示録の記者は、「不法の者」の支配のために、特にフランスに起こる恐ろしい結果をも指摘している。

➤主の天使は、次のように言った。『**彼らは、42か月の間この聖なる都を踏みこむであろう。そしてわたしは、わたしのふたりの証人に、荒布を着て、1260日のあいだ預言することを許そう。**』……そして、彼らがそのあかしを終えると、底知れぬ所からのぼって来る獣が、彼らと戦って打ち勝ち、彼らを殺す。彼らの死体はソドムや、エジプトにたとえられている大いなる都の大通りにさらされる。

➤彼らの主も、この都で十字架につけられたのである。……地に住む人々は、彼らのことで喜び楽しみ、互に贈り物をしあう。このふたりの預言者は、地に住む者たちを悩ましたからである。3日半の後、いのちの息が、神から出て彼らの中にはいり、そして、彼らが立ち上がったので、それを見た人々は非常に恐怖に襲われた」（黙示録11：2－11）。

➤ここに、「42か月」と「1260日」という2つの期間があげられているが、これは同じもので、キリストの教会がローマの圧迫を受ける期間を表わしている。1260年の法王至上権時代は、紀元538年に始まったから、1798年に終わることになる。この時、フランスの軍隊がローマに侵入し、法王を捕虜にした（→AD1798、2/17 ナポレオンの将軍ルイ・アレクサンドル・ベルティエがローマに入り、ローマ教皇ピウス6世を逮捕幽閉、翌年、幽閉先で死亡した）。そして彼は配所（→流罪によって流された場所）で死んだ。その後、すぐ新法王が選ばれたけれども、法王制度は、もはや以前のような権力を振うことはできなかった。

➤教会の迫害は、1260年の全期間を通じて続いたわけではなかった。神は、神の民をあわれんで、火のような試練の期間を短縮された。救い主は、教会にふりかかる「**大きな患難**」を預言して言われた。「もしその期間が縮められないなら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、選民のためには、その期間が縮められるであろう」（マタイ24：22）。迫害は、宗教改革（1517年）の影響を受けて、1798年より前に終わったのである。

2人の証人 →聖書：二人の証人（黙示録11：3、4、8）

➤2人の証人について、預言者は、次のように言っている。「彼らは、全地の主のみまえに立っている2本のオリーブの木、また、2つの燭台である。」また詩篇記者は、「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です」と言った（黙示録11：4、詩篇119：105）。**2人の証人**というのは、旧約と新約の聖書を表わしている。両方とも、神の律法の起源とその永続性に関する重要な証言である。両者はまた、救いの計画の証人でもある。旧約聖書の型、犠牲、預言は、**来たるべき救い主**をあらかじめ示している。新約聖書の福音書と手紙とは、型と預言に示されたとおりに**来られた救い主**について語っている。

➤「わたしは、わたしの2人の証人に、荒布を着て、1260日のあいだ預言することを許そう。」この期間の大部分の間、神の証人は、人の目につかない状態にあった。法王権は、真理の言葉を人々から隠す

的権力があらわれたのである。

神を否定する国の出現

聖書を崇敬すると言いながら、それを人々の知らない言語のまましまい込んで、人々から隠しておくことがローマの政策であった。ローマの統治下において、証人たちは、「荒布を着て」預言した。しかし、もう1つの権力一底知れぬ所からのぼって来る獣一があらわれて、神の言葉に対して公然と戦いをいどむのであった。

▶証人たちが大通りで殺され、その死体を横たえたという「**大いなる都**」は、**エジプト**に「たとえられて」いる。聖書歴史にあらわれているすべての国々の中で、エジプトほど、生きた神の存在を大胆に否定し、神の命令に抵抗した国はない。また、エジプトの王ほど、天の権威に対して、公然たる横暴な反逆を企てた王はない。モーセが主の名によって、彼に使命を伝えた時、パロは高慢に答えた。「**主とはいったい何者か。わたしがその声に従ってイスラエルを去らせなければならないのか。わたしは主を知らない。またイスラエルを去らせはしない**」(出エジプト5：2)。これは**無神論**である。

▶そして、エジプトにたとえられた国は、同様に、生きた神の要求を拒み、同じような不信と反抗の精神をあらわすのである。「大いなる都」はまた、**ソドム**に「たとえられて」いる。ソドムが神の律法を犯して腐敗したのは、特に放縦(ほうしょう：思うままにふるまうこと)の点で著しかった。そこで、この聖句の記述にあてはまる国においては、この罪もまた著しい特徴となるのであった。

▶預言の言葉に従うならば、1798年の少し前に、サタンの起源と性質をもったある種の権力が、立ち上がって聖書に戦いをいどむのであった。そして、神の2人の証人の証言がこうして沈黙させられるその国において、パロの無神論とソドムの放縦とがあらわれるのであった。

▶この預言は、フランスの歴史において、最も正確に最も著しく成就した。革命のさなか、1793年に、「文明国に生まれて教育を受け、ヨーロッパ諸国中最も優れた国の1つを統治する権利を有する人々から成る議会が、人の心が抱く最も厳粛な真理を、声をそろえて否定し、神に対する信仰と礼拝を満場一致で放棄するのを、世界は初めて聞いたのである。」

▶「フランスは、宇宙の創造主に対して公然と反逆の手をあげた国として、公式の記録が残っている世界でただ1つの国である。英国、ドイツ、スペインその他の国にも、多くの神を汚す者、多くの無神論者があらわれたし、これからも現れるであろう。しかし、**フランスは、議会の決議によって無神論を宣言し、首都の住民全体と他の地域の大群衆とが、男も女もその宣言を喜び、歌い踊ったという、世界史上唯一の国である。**」

▶またフランスは、特にソドムで著しかった特徴をあらわした。革命の時の墮落と腐敗の状態は、平原の町々に滅亡をもたらしたものと似ていた。そして歴史家は、預言のとおり、フランスの無神論と放縦な生活をともにあげている。「宗教に影響を及ぼすこれらの法律と密接な関係があったのが、結婚を軽視した法律であった。結婚は人間が結ぶ最も神聖な契約であって、その永続が社会の統合に最も貢献するものであるにもかかわらず、これを、2人の人間が随意に結んだり解いたりできる単なる一時的な民事契約にしてしまった。

▶……もし悪魔が、家庭生活の尊ぶべきもの、優雅なもの、また永続的なものを最も効果的に破壊し、それと同時に、その目的としている害毒を、世々にわたって引き続いて及ぼそうとするならば、結婚の墮落以上に効果的な手段を考え出すことはできなかつたであろう。……機知に富んだことを言うことで有名な女優、ソフィ・アルノーは、フランス革命時代の結婚を、『**姦淫の秘蹟**』と評した。」

フランスの殉教者たち

▶「彼らの主も、この都で十字架につけられたのである。」この預言の言葉もまた、フランスによって成就した。キリストに対する敵意が、この国以上に著しくあらわれたところはない。真理が、これ以上に激しく残酷な反対に会った国は他にない。フランスは、福音を信じる者に迫害を加えることによって、主の弟子たちを通してキリストを十字架につけたのであった。

▶聖徒の血は、幾世紀にわたって流された。ワルド派の人々は、「神の言葉とイエス・キリストのあかしのために」、ピエモンテ(→イタリア共和国北西部に位置する州)の山々で彼らの生命を捨てた。彼らの

同信の仲間たち、フランスのアルビ派（→南フランスのトゥールーズを中心としたアルビ地方に深く浸透した政治勢力で、キリストの人性や化体説→ローマ・カトリック教会の正統教義で、ミサにおいて、パンとぶどう酒が、その実体において完全にキリストの肉と血に変化するという信仰を否認してローマ教会から異端と見なされた）の人々も、真理のための同様のあかしを立てた。宗教改革時代には、その支持者たちは恐ろしい拷問によって殺された。国王や貴族、上流の婦人や優雅な少女、国家の誇りである騎士たちが、イエスの殉教者たちの苦悩を見て楽しんだ。勇敢なユグノー教徒たちは、人間の心が最も神聖視するこれらの権利のために闘い、多くの激戦地で彼らの血を流した。プロテスタント教徒は、法律の保護外の者とみなされ、彼らの首には懸賞金がつけられて、あたかも野獣のようにかり立てられた。

▶「荒野の集会」と呼ばれる、昔のキリスト教徒の子孫が、18世紀のフランスにわずかながら残っており、南方の山中に隠れて、先祖の信仰を依然として守っていた。彼らが、夜、山腹や寂しい荒れ地で集会を開こうとすると、竜騎兵（近世ヨーロッパにおける兵科一戦闘を担当する区分の一つで、一般には火器で武装した騎兵を指す）に追撃され、一生ガレー船（→主として人力で櫂を漕いで進む軍艦）につながれる奴隷として引き立てられるのであった。



▶フランスの、最も純潔で最も洗練され、最も知的な人々が、強盗や暗殺者に混じって鎖につながれ、恐ろしい拷問を受けた。少しは情けある扱いを受けた他の者たちは、武装もなく無力なまま、ひざまずいて祈っているところを射殺された。彼らの集会の場所は、何百人という年老いた人々、無防備な婦人、罪のない子供たちが、彼らが集会をもったその場所で殺されて地上に捨てておかれた。彼らがよく集会を開いていた山腹や森林を通る時、「数歩行くごとに、草原に死体が散在するか、または木からたれ下がっている」を見つけるのは、珍しいことではなかった。彼らの地方は、剣とおのと火刑のまき束で荒らされ、「陰うつな一大荒野と化した」「こうした残虐行為は、……暗黒時代ではなくて、輝かしいルイ14世の時代に行われたのであった。その当時、科学は発達し、文芸は栄え、宮廷や首都の聖職者たちは学識ある雄弁家たちで、柔和と愛の美德を大いに愛好する人々だったのである。」

聖バーソロミューの虐殺

（→サンバルテルミの虐殺：1572年、ユグノー戦争最中の旧教徒による新教徒の虐殺。旧教徒の母后カトリーヌ＝ド＝メディシスが首謀し、宮廷内の新教徒貴族を一掃、さらに新教徒虐殺は全土に広がり、大きな打撃を受けた）

▶しかし、陰惨な犯罪の歴史中最も暗黒で、各世紀を通じて行われたあらゆる極悪非道な行為中、最も恐ろしいものは、聖バーソロミューの虐殺であった。世界は今でも、あの最もひきょうで残忍な殺害の光景を思い起こして身震いする。フランスの王（→シャルル9世）は、ローマ教の司祭や高位聖職者に迫られて、恐ろしい行為に彼の許可を与えた。夜の静けさを破って聞こえる鐘の音が、虐殺の合図であった。幾千のプロテスタントは、王の名誉にかけての約束に信頼して、自分たちの家で眠っていたが、何の警告もなく引きずり出されて、冷酷に殺された。

▶エジプトの奴隷から神の民を導き出した目に見えない指導者がキリストであったように、殉教者の数を増したこの恐ろしい行為において、その部下たちの目に見えない指導者はサタンであった。虐殺は、パリで7日続き、特にその最初の3日間は狂暴を極めた。そしてそれはパリ市内だけでなく、王の特別な命令によって、プロテスタントのいるすべての地方や町々にも及んだ。老若男女の差別はなかった。

▶何も知らぬ赤ん坊や白髪の老人にも容赦はなかった。貴族も農民も、老いも若きも、母も子もともに切り殺された。フランス全国において、虐殺は2か月間続いた。国民の花とも言うべき7万人が殺害された。

▶「虐殺の知らせがローマに伝わると、聖職者たちの喜びは非常なものであった。ローヌの枢機卿（すうききょう）は、使者に1000クラウンを報賞として与えた。聖アンジェロ城の大砲は祝砲を放った。そして、すべての塔から鐘の音が聞こえ、かがり火は夜を昼のように明るくした。そして、グレゴリー13世（Gregorius XIII、1502年1月7日～1585年4月10日、第226代ローマ教皇、在位：1572年～1585年）は、枢機卿やその他の高位聖職者を従えて、長い行列を作って聖ルイ教会へ行き、そこでローヌの

枢機卿は、『テ・デウム』（→ラテン語で「神よ、あなたを称えます」を意味）を詠唱した。……虐殺を記念するメダルが鑄造され、バチカンでは今でも、バサーリ（→ジョルジョ・ヴァザーリ Giorgio Vasari、1511～1574）の3つの壁画を見ることができる。それは、提督襲撃の場面、王が虐殺を計画しているところ、そして虐殺そのものの光景である。グレゴリーは、シャルル（→フランス王シャルル9世）に金製バラ章を贈った。そして、虐殺があってから4か月後、……フランスの司祭の説教を満足げに聞いた。……この司祭は、『幸福と喜びに満ちた日、法王が知らせを受けて、神と聖ルイとに感謝するために、威儀を正して行かれたあの日』について、語ったのであった。」

▶聖バーソロミューの虐殺を引き起こした同じ精神が、革命の場面をも導いた。イエス・キリストは詐欺師であると宣言され、フランスの無神論者たちはこぞって「卑劣漢をやっつけろ」と叫んだが、これはキリストのことであった。天を恐れない冒涇と言語道断の罪悪とがともに行われ、最も卑劣な人間たち、残酷悪徳のかぎりを尽くした無頼漢たちが、最も賞賛された。こうしたすべてのことにおいて、最高の栄誉がサタンにささげられた。それに反して、真理、純潔、無我の愛という特質をもっておられるキリストが、十字架につけられたのであった。

無神論の挑戦

▶「底知れぬ所からのぼって来る獣が、彼らと戦って打ち勝ち、彼らを殺す。」革命と恐怖政治の時代にフランスを支配した無神論的権力は、これまで世界になかったほどの戦いを、神と聖書に対していどんだ。神の礼拝が、国会によって廃止された。聖書は集められて、あらゆる軽べつを浴びせられながら、公衆の前で焼かれた。神の律法はふみにじられた。聖書的な諸制度は廃止された。毎週の休日は廃止され、その代わりに、10日目が歓楽と冒涇の日に定められた。バプテスマと聖餐式は禁止された。そして墓地には、死は永遠の眠りであると宣言する掲示が、目立つように立てられた。

▶神を恐れることは、知恵のはじめであるどころか、愚のはじめであると言われた。自由と国家とに対するもの以外のすべての宗教的礼拝は禁止された。「パリの憲法宣誓司教は、国民の代表たちの前で、最も恥知らずで言語道断の茶番劇の主演を演じさせられた。……彼は行列を従えて出て来て、彼が長年教えてきた宗教は、すべての点において聖職者たちの政略であって、歴史にも神聖な真理にも基づいていないものであると、国民議会で宣言させられた。彼は、厳粛で明白な口調で、これまで自分が礼拝のために献身してきた神の存在を否定し、これからは、自由、平等、徳、道義に忠誠を誓うと言った。それから彼は、自分の司教の衣服を脱いで卓上におき、国民議会の議長から友愛の抱擁を受けた。数名の背教した司祭が、この高位聖職者の例にならった。

▶「地に住む人々は、彼らのことで喜び楽しみ、互に贈り物をしあう。このふたりの預言者は、地に住む者たちを悩ましたからである」（黙示録11：10）。不信のフランスは、神の2人の証人の譴責の声を沈黙させた。真理の言葉は殺されて、大通りに横たえられた。そして、神の律法の制限や要求を憎んだ人々は、歓声をあげた。人々は、公然と天の王に挑戦した。昔の罪人たちのように、「神はどうして知り得ようか、いと高き者に知識があるか」と叫んだ（詩篇73：11）。

▶新しい秩序のもとでの司祭の1人は、信じられないような大胆な冒涇さで言った。「神よ、もし存在するならば、あなたの傷つけられた名のふくしゅうをせよ。わたしは挑戦する。あなたは黙っている。怒ることはできまい。今後、だれがあなたの存在を信じるであろうか。」これはパロの言った、「主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従わ……なければならぬのか。」「わたしは主を知らない」という言葉と、なんとよく似ていることであろう。

理性の女神

▶「愚かな者は心のうちに『神はない』と言う」（詩篇14：1）。そして、主は、真理を曲解する者について、「彼らの愚かさは……多くの人に知れて来るであろう」と言われた（IIテモテ3：9）。フランスは、「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者」である生きた神の礼拝を放棄して間もなく、理性の女神の礼拝という低劣な偶像礼拝に陥った。不品行な一女性が、この理性の女神に仕立てられた。しかも、これが、国民を代表する議会において、そして、行政と立法の最高の権威者たちによって、行われたのである。歴史家は、次のように言っている。「この狂気の時代の儀式の1つは、不合理と不敬虔とを結合した

点で、他に類を見ない。議会の扉が広く開かれ、音楽隊を先頭に、市当局の役員が厳粛な行列を作って、自由の賛歌を歌いながら入って来た。そして、これから彼らが礼拝する対象、すなわち、彼らが理性の女神と称するところの、ベールをかけた女性を案内してきた。いよいよ会場内に入ると、彼らは厳かに彼女のベールを脱がせて、議長の右側にすわらせた。そしてその時人々は、彼女がオペラのダンサーであることに気づいた。……この女性に対して、フランスの国会は、彼らの礼拝する理性に最もふさわしい代表者として公の敬意を表わしたのである。

▶この不敬虔で、言語道断の無言劇は流行した。理性の女神の除幕式は、革命の最高潮に遅れをとるまいとする住民のいる、国内の至る所でくり返され模倣された。」

▶理性の女神の礼拝を提案した演説者は言った。「代議士諸君、今や狂信は理性に敗れた。そのかすんだ目は、輝かしい光に耐えられなかった。今日、無数の群衆がゴシックの丸天井の下に集まり、初めて真理を反響させたのである。フランス人は、ここで唯一の真の礼拝、自由と理性の礼拝を行った。ここでわれわれは、共和国の軍隊の隆盛を祈った。ここでわれわれは、生命のない偶像を捨てて、理性、生命のある像、自然の傑作を礼拝したのである。」

▶女神が議場に入ってきた時、演説者は彼女の手をとり、会衆に向かって言った。「人間たちよ。あなたがたの恐怖が造り出した神の、無力な怒りの前に震えるのをやめよ。これからは、理性以外の神を認めるな。わたしは、その最も高貴で純粋な像を紹介する。もしあなたがたが偶像を持たねばならぬならば、このようなものにだけ犠牲をささげよ。……堂々たる自由の殿堂の前で、理性から幕を除こう！」

▶「女神は、議長から抱擁を受けたあとで、豪華な車に乗せられ、神の地位につくために、大群衆の中を通過してノートルダムノートルダムの聖堂へ導かれた。ここで彼女は、高い祭壇にあげられて、列席したすべての者の礼拝を受けた。」

▶これに続いてまもなく、公衆の前で聖書が焼かれた。ある時、「民間博物館協会」の人々が、「理性万歳！」と叫びながら市の公会堂に入った。棒の先には、半焼けになった何冊かの本を突き刺していたが、その中には、祈祷書、ミサ典書、旧新約聖書などがあった。それらは「人類をして犯さしめたあらゆる愚行を、大いなる火でもって償ったのである」と会長は言った。

ローマの政策

無神論者が完成しつつあった仕事を、最初に始めたのは法王権であった。フランスをこのように速やかに破滅に陥れた、社会的政治的宗教的状況を引き起こしたのは、ローマの政策であった。 著作家たちは、革命の恐怖に言及して、これらの暴挙は国王と教会の責任であると述べている。厳密に言うならば、それらは教会の責任であった。

▶法王側は、王たちに、宗教改革に対する反感を抱かせ、それが王の敵であり、国家の平和と秩序を破壊する不穏な分子であると考えさせた。こうして、国王に最も恐ろしい残酷な行為と悲惨な迫害を行わせるのが、ローマのやり方であった。

▶自由の精神は、聖書と共に伝わった。福音が伝えられたところはどこでも、人々の心が覚醒された。彼らは、今まで自分たちを、無知と悪習と迷信の奴隷として縛っていた拘束を捨て始めた。彼らは、人間として思考し行動しはじめた。国王たちはこれを見て、彼らの専制政治の安泰を気づかった。

▶ローマは、彼らのしつと深い恐怖心をたきつけるのに後れをとらなかった。1525年、フランスの摂政にあてて法王は言った。「この宗教狂（プロテスタント主義）は、宗教を混乱させ破壊するだけでなく、すべての主権者、貴族、法律、秩序、階級をも破壊するものである。」その数年後に、法王の使節は、王に警告して言った。「陛下、欺かれてはなりません。プロテスタントは、宗教的秩序とともにあらゆる市民的秩序をもくつがえすでしょう。……祭壇と同様に、王座も非常な危険にさらされております。……新しい宗教をとり入れることは、当然新しい政府をもたらすこととなります。」また神学者たちは、プロテスタントの教義は、「人々を目新しい愚かなものに誘い、国民の王に対する敬愛を失わせ、教会と国家を2つとも荒廃させる」と言って、人々の偏見をあおった。こうして、ローマは、フランスをして宗教改革に敵対させるのに成功した。「フランスにおいて、迫害の剣が最初に抜かれたのは、王位を安全にし、貴族を保護し、法律を維持するという名の下にであった。」

革命の遠因

➤国の支配者たちは、この致命的政策の結果を予見することが、ほとんどできなかった。聖書の教えは、正義、節制、真実、平等、慈愛など、国家の繁栄の基礎である原則を、人々の心と思いに植えつけたはずであった。「正義は国を高く」し、正義によって、「その位が……堅く立」つのである（箴言14：34、16：12）。

➤「正義は平和を生じ、正義の結ぶ実はとこしえの平安と信頼である」（イザヤ32：17）。神の律法に従う者は、真心から自分の国の法律を重んじて、守るのである。神を恐れる者は、すべての正当で合法的な権威を行使する王を、尊ぶのである。しかし、不幸なことに、フランスは聖書を禁止し、それを信じる者たちを追放した。幾世紀にわたって、原則に堅く立つ誠実な人々、知的鋭さと道徳的強靱さを持った人々、確信するところを公言する勇氣と、真理のために苦しむ信念を持った人々—こうした人々が幾世紀にもわたって、ガレー船の奴隷となって苦しみ、火刑にされ、あるいは牢獄でやせ衰えていった。幾千もの人々が逃亡して、安全な地に行った。そしてこれは、宗教改革が始まってから、250年間も続いたのである。

➤「その長期間のどの時代においても、迫害者の狂った怒りから逃亡する福音の使徒たちを見なかったフランスの世代は、ほとんどなかった。そして彼らは一般に、著しく優れた知能、技術、工芸、秩序を持っていて、逃亡した先の国々を富ませた。そして、彼らがこれらの優れた才能によって、他の国々を満たしたのに比例して、フランス自体はからっぽになっていった。追いやられた人々がみなフランスに残っていたならば、また、この300年の間に、逃亡者たちの産業的技術が、土地の耕作に向けられていたならば、そしてこの300年の間に彼らの芸術的趣向が、フランスの製品を改善していたならば、また、もしこの300年の間に彼らの創造的才能と分析的能力とが、フランスの文学を豊富にし、科学を発展させていたならば、また、もし彼らの知恵がフランスの議会を指導し、彼らの勇敢さが戦場で戦い、彼らの公正が法律を制定し、聖書の宗教がフランス人の知能を啓発し、良心を支配していたならば、今、フランスはどんなにか栄光に輝いていたことであろう。フランスは、どんなにか偉大な、繁栄した幸福な国となり、諸国の模範となっていたことであろう。

➤しかし、盲目で冷酷な頑迷さのために、フランスは、その国土からすべての高潔な教師、すべての秩序の支持者、すべての真実な王位擁護者を追い払ってしまった。フランスは、自国を「名声と栄光」の国としたはずの人々に、火刑か追放か、そのどちらかを選べと言ったのであった。

➤ついに国家は、衰退の極に達した。もはや禁じるべき良心はなくなり、火刑に引きずっていくべき宗教はもうなくなった。かり立てて追放すべき愛国心は、もはやなくなってしまった。」そして、その恐るべき結果として、戦慄すべき革命が起きたのであった。

革命前夜

➤「ユグノー教徒（→フランス・オペラ）の逃亡によって、フランスは全般的に衰退した。製造業の繁栄していた都市が衰えた。肥沃な地方が元の荒れ地にもどった。まれな進歩の期間のあとに、知的沈滞と道徳的退化が続いた。パリは巨大な救貧院のようになり、革命が起こった当時は、20万の貧民が王からの施しを請うていた。イエズス会だけが、衰微していく国内にあって繁栄し、教会と学校と牢獄とガレー船の上に、恐ろしい圧政を行っていた。」

➤福音は、フランスに、政治的社会的諸問題—聖職者、国王、立法者たちの手に負えず、ついに国家を無政府状態と破滅に陥れたところの諸問題—の解決をもたらすはずであった。しかし人々は、ローマの支配下にあつて、自己犠牲と無我の愛という、救い主のすばらしい教訓を忘れていた。彼らは、他人の幸福のために自分を犠牲にすることから、かけ離れてしまっていた。金持ちが貧者を圧迫してもだれからも譴責されず、貧者は、その苦役と墮落からの救いを与えられなかった。富と権力を持つ者の利己心は、ますます露骨で圧制的になった。幾世紀にわたって、貴族の貪欲と放蕩は、農民に対する苛酷な搾取を行ってきた。金持ちは貧者をしいたげ、貧者は金持ちを憎んだ。

➤多くの地方において地所は貴族が所有し、労働者階級は小作人に過ぎなかった。彼らは地主の言いなりであつて、彼らの法外な要求に従わなければならなかった。教会と国家をささえる負担は、中流と下層階

級に負わされ、彼らには国家と聖職者から重税がかけられた。

▶「貴族は快樂の追求を第一とし、圧迫者たちは農民たちが餓死しようといっこうにかまわなかった。……民衆はどんな場合でも、地主の利益だけを考えなければならなかった。農業労働者の生活は労働の連続で、救われる道のない悲惨な生活であった。彼らの苦情は、それを訴えることができたにしても、おうへいな軽べつ的態度で扱われた。法廷は常に貴族の言い分を聞いて、農民の言い分を聞かなかった。裁判官がわいろを受け取るのは、公然の秘密であった。このような全般的腐敗の体制の中では、貴族のほんの気まぐれが法としての力を持った。一方では世俗の権力が、そして他方では聖職者たちが、庶民から巻き上げた税金の、その半分も王室や教会の金庫には入らなかった。残りは遊興と放縦のために浪費されてしまった。こうして、同胞を窮乏に陥れた人々自身は税金を免れ、法律によって、あるいは習慣に従って、国家のすべての要職を占めていた。特権階級は、15万人に達していた。そして、彼らを満ち足らせるために、幾百万の人々が、望みのない惨めな生活を余儀なくされていた」。

▶宮廷は、ぜいたくと放蕩にふけていた。国民と支配者の間に信頼はなかった。政府の政策はみな、たくらみのある我欲に満ちたものであると、疑惑の目で見られた。革命が起こる前、50年以上にわたって、ルイ15世が王位を占めていたが、彼は、そのような墮落した時代においてさえ、怠惰で軽薄、淫蕩な王として有名であった。腐敗し残酷な上流階級、窮乏に陥り無知な下層階級、国家の財政困難、国民の憤激などを見れば、預言者でなくても、恐ろしい暴動が起ころうとしていることは予想できた。王は、顧問官たちの警告に対して、「わたしの存命中は、現状のままで継続せよ。わたしの死後は、どうなってもかまわない」と答えるのが常であった。改革の必要を力説してもむだであった。王は弊害を認めてはいたが、それを改める勇気も力もなかった。彼の怠惰で利己的な「あとは野となれ山となれ」という答えは、切迫したフランスの運命を、あまりにも正確に描写していた。

ローマ教と無神論

▶ローマは、王や支配階級のしつと心に訴えて、国民を奴隷として縛っておくように彼らを動かした。ローマはこうすれば国家が弱くなり、この方法で支配者と国民を両方ともローマの奴隷にしておけることをよく知っていた。ローマは、はるか将来を見通して、人間を思いのままに奴隷にするには心を束縛しなければならないこと、また、彼らとその束縛からどうしても逃れることができないようにするには、自由を与えないようにしなければならないことを知っていた。ローマの政策がひき起こした肉体的苦痛より幾千倍も恐ろしいことは、道徳的墮落であった。人々は聖書を奪われ、偏狭で利己的な教えを聞かせられ、無知と迷信に閉ざされていた。そして彼らは、悪習に陥り、全く自制ができなくなっていた。

▶しかしこれらすべてのことの結果は、ローマが意図したものとは非常に異なったものであった。ローマの行なったことは、大衆を盲目的にローマの教義に服従させる代わりに、彼らが無神論者と革命論者にしてしまった。彼らはローマ・カトリック教を、僧侶の策略であるとして軽べつした。彼らは、聖職者たちを、彼らを圧迫するものの一部とみなした。彼らが知っている唯一の神は、ローマの神であった。またその教えが、彼らの唯一の宗教であった。彼らは、ローマの貪欲と残酷は、聖書が結ぶ当然の実であると考え、そのようなものはいらぬと思った。

▶ローマは、神の品性を誤って伝え、神の要求をゆがめていた。そこで人々は、聖書もその著者も、共に拒否してしまった。ローマは、聖書がそれを認めているかのように装いつつ、自分の教義に盲目的信仰を要求してきた。その反動として、ボルテール(→フランスの哲学者、文学者、歴史家)と彼の仲間たちは、聖書を全面的に拒否し、至る所に不信の害毒を広めた。ローマは人々を弾圧し、苦しめてきた。そして今度は、墮落し狂暴になった大衆が、ローマの暴虐をはねのけて、すべての束縛を投げ捨てた。彼らは、自分たちが長い間尊敬を払ってきた華麗な詐欺に憤激して、真理と虚偽の両方を拒絶した。そして、放縦を自由と取り違えて、悪徳の奴隷たちは自由を得たものと思って狂喜した。

▶革命が始まった時、人々には王の譲歩のもとに、貴族と聖職者を合計した数以上の代表数が与えられた。こうして彼らは、政治の実権を握った。しかし彼らは、それを賢明に適度に用いる準備がなかった。彼らは、自分たちが苦しんできた圧迫を除くことに熱心で、社会の改造を断行しようとした。長い間虐待されてきた苦い思い出をもつところの憤激した群衆は、もはや耐えられないまでになった悲惨な状態を変革

し、このような苦境に彼らを陥れたと思われる者たちにふくしゅうしようと決意した。圧迫を受けた者たちは、暴政の下で学んだことを実行し、彼らを圧迫した者たちの圧迫者となった。

革命勃発

▶不幸なフランスは、自分がまいた種の収穫を、血で刈り取った。フランスがローマの支配力に従った結果は、実に恐ろしいものであった。フランスが、ローマ・カトリック教会の影響下において、宗教改革の初期に最初の火刑柱を立てたところに、革命は、その最初のギロチンをすえた。16世紀に、プロテスタントの信仰のための最初の殉教者が焼かれたその同じ場所で、18世紀に、最初の犠牲者がギロチンで殺された。フランスに癒しをもたらしたはずの福音を拒んだために、フランスは、不信と破滅の門を開いた。神の律法の抑制を放棄してしまった時に、人間の法律では人間の激情の強力な潮流を、抑止できないことが明らかになった。そして国民は、反乱と無政府状態に陥ってしまった。聖書に戦いをいどんだことが、世界史において恐怖政治の時代と呼ばれる一時代を開くことになった。人々の家庭と心から、平和と幸福が去った。だれも安心しておられなかった。今日勝ち誇っている者が、明日は嫌疑をかけられて罪に定められた。暴力と欲望が、わがもの顔に横行した。王侯、聖職者、貴族たちは、興奮して熱狂した人々の残虐行為に服するほかなかった。彼らのふくしゅう欲は、王の処刑によって、いっそう強烈になるばかりであった。そして、王の処刑を命じた人々が、間もなく引き続いて処刑台に上った。革命の反対者であるという嫌疑を受けた者たちは、皆殺しにされた。

▶牢獄は満ちあふれ、一時は囚人が20万人を超えた。国内の諸都市は、恐ろしい光景で満ちた。革命家の一派は他の一派と争い、フランスは、大群衆の激情のあらしのままに揺れる一大戦場と化した。「パリでは暴動が次々に起こり、市民たちは、さまざまの党派に分かれていたが、それは互いに滅ぼし合おうとしているとしか思えなかった。」国を挙げての悲惨に加えて、国家はヨーロッパ大同盟軍との、長期にわたる破壊的な戦争状態に陥った。「国家は破綻はたんをきたし、軍隊は給料の支払を要求し、パリっ子たちは食に飢え、地方は盗賊に荒らされ、文明は、無政府と放縦のために絶滅しそうになっていた。」

▶ローマがたんねんに教えた残虐と拷問のやり方を、人々はあまりにもよく覚えていた。ついに、報復の日がやって来た。今度、牢獄に入れられ、火刑柱に引かれていくのは、イエスの弟子たちではなかった。この人々は、ずっと前に殺されるか、あるいは追放されるかしていた。今、苛酷なローマは、流血行為を喜ぶように自分が訓練してきた人々の、恐ろしい力を感じた。「フランスの聖職者たちが長年にわたって演じて来た迫害の前例は、今彼らに手厳しくはね返って来た。処刑台は、司祭の血で赤く染まった。かつてユグノー教徒で充満したガレー船と牢獄は、今、彼らの迫害者たちで満員になった。ローマ・カトリックの司祭たちは、鎖で腰掛けにつながれてかいをこぎ、教会が温和な異端者たちに容赦なく味わせた苦悩を、あますところなくなめたのであった。」

恐怖の時代

▶「最も凶悪な裁判官が最も残忍な法典を執行する時、極刑の危険を冒さずには……隣人とのあいさつも祈りもできない時、密偵が至る所に潜んでいる時、ギロチンが毎朝忙しく長時間動く時、牢獄が奴隷船の船倉のように満員の時、下水が血であわ立ってセーヌ川に流れる時、このような時が到来した。……パリでは毎日、処刑を受ける人々を満載した護送車が通りを通過している時に、最高委員会によって派遣された地方の総督たちは、首都パリでさえ行われたことのないような残虐行為を行った。彼らの殺人のためには、恐ろしい機械の刃が上り下りするのでは遅すぎた。数珠じゅずつなぎにされた囚人たちが、ブドウ弾でなぎ倒された。

▶満員のはしけ（→本船から岸壁へ、岸壁から岸壁へと貨物の移動等に使用される輸送船）の底に穴が開けられた。リオンは荒地と化した。アラスでは、すぐに殺すという残酷な憐れみさえ囚人たちに与えられなかった。ロアール川沿岸では、ソーミュールから海まで、2人ずついまわしい抱擁をさせた裸の死体を、カラスやトビの大群の餌食えじきにした。女も年寄りも容赦なく殺された。のろわしい政府に殺された17才の少年少女の数は数百もあった。母の乳ぶさからもぎ取られた赤ん坊は、ジャコバン党員のほこ先からほこ先へと投げ渡された」。わずか10年の間に、おびただしい数の人間が殺された。これはみな、サタンの望むところであった。

▶これはサタンが、幾時代にわたって確保しようとしてきたことであった。彼の策略は、初めから終わりまで欺瞞ぎまんであって、彼の不動の目的は、人間の世界に不幸と悲惨をもたらす、神のみ業を傷つけ、汚し、神の慈悲と愛のみ心をだいなしにし、こうして天を悲しませようとするにある。こうしてサタンは、その欺瞞的な方法によって人の心を盲目にし、これらすべての不幸が創造主の計画の結果であるかのように考えさせて、彼の働きを神のせいだと思わせようとするのである。同様に、彼の残酷な力によって墮落し、残忍になった者たちが自由を得ると、サタンは彼らに、極端で非道なことを行わせる。すると暴君や圧制者は、この無軌道な放縦を、自由の結果が何であるかを示す好例であるというのである。

▶サタンは、1つの扮装の誤りが見破られると、また別の仮面をかぶって現われ、群衆は前と同様に熱狂してこれを迎える。ローマ・カトリック教が欺瞞であることが人々にわかり、これを用いて人々に神の律法を犯させることができなくなると、サタンは、すべての宗教は人をまどわすものであり、聖書は作り話であると主張した。そして彼らは、神の律法を放棄して、無軌道な罪の生活に陥った。

真理拒否の結果

▶フランスの国民をこのような悲惨な状態に陥れた致命的誤りは、真の自由は神の律法の範囲内にあるという一大真理を無視したためであった。「どうか、あなたはわたしの戒めに聞き従うように。そうすれば、あなたの平安は川のように、あなたの義は海の波のように」なる。「主は言われた、『悪い者には平安がない』と」。「しかし、わたしに聞き従う者は安らかに住まい、災に会う恐れもなく、安全である」（イザヤ48：18、22、箴言1：33）。

▶無神論者、不信仰者、背教者たちは、神の律法に反対し非難を向けるが、彼らのもたらす結果を見るならば、人類の幸福は神の律法に服従することにあることがわかるのである。神の書から教訓を読み取ろうとしない者は、諸国の歴史の中にそれを読み取るように命じられている。

▶サタンが、ローマ教会を通じて人々を神に背かせた時、彼の活動は隠されていた。そして、彼の働きは巧みに偽装されていたので、その結果起こった墮落と不幸は、罪を犯した結果であるとは思われなかった。また、彼の力は、これまで神の聖霊の働きによって妨げられ、十分に実を結ぶに至っていなかった。人々は原因を探ることをせず、彼らの不幸の源を見出さなかった。しかし、革命が起こり、議会は公然と神の律法を廃した。そして、それに続いた恐怖時代に、その原因結果がすべての者に明らかとなった。

▶フランスが公然と神を拒み、聖書を放棄した時、悪人たちと暗黒の霊とは、彼らが長く望んでいた目的を達成して喜んだ。それは、神の律法の制限を受けない国であった。悪の行為に対する判決が、速やかに執行されないために、人の子らの心は「もっぱら悪を行うことに傾いている」（伝道の書8：11）。しかし、公正で義である律法を犯すならば、その結果は必然的に不幸と破滅である。**人間の悪事は、直ちに罰が与えられないにしても、必ず破滅をもたらすのである。**幾世紀にもわたる背信と罪悪は、報復の日の神の怒りを蓄えてきた。そして、彼らの罪が満ちた時に、神を軽べつした人々は、神の忍耐がつき果てることがどんなに恐ろしいことであるかを知ったのであるが、時はすでに遅かった。

▶サタンの残酷な力を抑えていた神の霊の抑制力が、大半取り除かれた。そして、人々を不幸にすることだけを喜びとしているサタンのなすがままになった。反逆に荷担した者は、その実を刈り取った。そして地はついに筆紙に尽くし得ない（→ひっしにつくしえない：あまりにはなはだしくて、とても文章に書き表せない）恐ろしい犯罪で満たされた。荒廃した地方や破壊された都市から、恐ろしい叫び、耐えがたい苦悩の叫びがあがった。フランスは、地震で震動するかのように揺れ動いた。宗教、法律、社会秩序、家族、国家、そして教会などすべてのものが、神の律法に反抗してあげられた邪悪な手で打ち倒された。賢者は実にこう語った。「悪しき者は、その悪によって倒れる。」「罪びとで百度悪をなして、なお長生きするものがあるけれども、神をかしこみ、み前に恐れをいだく者には幸福があることを、わたしは知っている。しかし悪人には幸福がない」（箴言11：5、伝道の書8：12、13）。「彼らは知識を憎み、主を恐れることを選ばず、」「自分の行いの実を食らい、自分の計りごとに飽きる」（箴言1：29、31）。

聖書の勝利

▶「底知れぬ所からのぼって来る」神を汚す権力に殺された神の忠実な証人は、長く沈黙していなかった。「3日半の後、いのちの息が、神から出て彼らの中にはいり、そして、彼らが立ち上がったので、それを

見た人々は非常な恐怖に襲われた」(黙示録 11 : 11)。キリスト教を廃し聖書を破棄する法令が、フランスの議会を通過したのは、1793年であった。それから3年半後にはこの法令は廃止され、聖書を読むことを許す決議が、同じ議会において採択された。聖書を拒否した結果起こった極悪非道さに、世界は驚きを禁じ得なかった。そして人々は、神に対する信仰の必要と、神の言葉が、徳と道徳の基礎であることを認めたのであった。主は言われた、「あなたはだれをそしり、だれをののしったのか。あなたはだれにむかって声をあげ、目を高くあげたのか。イスラエルの聖者にむかってだ」(イザヤ 37 : 23)。「それゆえ、見よ、わたしは彼らに知らせよう。すなわち、この際わたしの力と、わたしの勢いとを知らせよう。彼らはわたしの名が、主であることを知るようになる」(エレミヤ 16 : 21)。

▶ 2人の証人について、預言者はなお次のように言っている。「その時、天から大きな声がして、『ここに乗ってきなさい』と言うのを、彼らは聞いた。そして、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た」(黙示録 11 : 12)。フランスが神の2人の証人に戦いをいどんで以後、かえって彼らは、それまでになかったほどあがめられてきた。1804年に、英国聖書協会が組織された。これに続いてヨーロッパ大陸に、多くの支部をもった同様の聖書協会が設立された。1816年には、米国聖書協会が設立された。英国聖書協会が設立されたとき、聖書は50か国語で印刷配布された。そしてその後、聖書は幾百の国語と方言に翻訳されてきた。

▶ 1792年以前の50年間、外国伝道事業についての関心はなかった。新たな伝道協会は設立されなかった。そして、異教国にキリスト教を宣べ伝えようと努力する教会は、ほとんどなかった。しかし、18世紀の終わりになって、大変化が起こった。人々は、合理主義の結果に不満を感じ、神の啓示と体験的宗教の必要を痛感したのである。この時から外国伝道事業が、これまでにない発展を遂げたのであった。

▶ 印刷技術の発達、聖書配布事業を促進した。諸国間の交通機関の発達、昔ながらの偏見の壁や国家的排他主義の崩壊、ローマ法王の俗権の喪失などが、神の言葉が入っていく道を開いた。数年前から聖書は、ローマの通りにおいてさえ、何の束縛も受けずに販売されている。そしてそれは、今、人類の住んでいるところはどこにでも、配布されるようになったのである。

▶ かつて無神論者ボルテールは、次のように自慢して言った。「12人がキリスト教を設立したということ、わたしはもう聞き飽きた。わたしは、それをくつがえすのにひとりで十分であることを証明しよう。」彼の死後、幾世代が過ぎ去った。幾百万の者が、聖書に対する戦いに加わった。しかし聖書は、滅びどころか、ボルテールの時代に100あったところには、1万、いや10万の神の書があるのである。ある初期の改革者は、キリスト教会に関して、「聖書は多くの金づちをすりへらしたかなどこのようなものである」と言った。

▶ 「すべてあなたを攻めるために造られる武器は、その目的を達しない。すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、あなたに説き破られる」と主は言われた(イザヤ 54 : 17)。

▶ 「われわれの神の言葉はとこしえに変わることはない。「すべてのさとしは確かである。これらは世々かぎりなく堅く立ち、真実と正直とをもってなされた」(イザヤ 40 : 8、詩篇 111 : 7、8)。

人間の権威の上に建てられたものはみな崩れる。しかし、神の不変の言葉の上に基礎をおいたものは、永遠に立つのである。

出典(本文)：希望への光 P.1721~1732 各時代の争闘 第15章「聖書とフランス革命」
エレン・G・ホワイト 著より

④本文(次頁参考を含む)中、下記については編集者(谷口 一)が加筆等したものです。

ゴシック体への変換、下線、補足文章(→・・・)

図：神の救いの計画 ©H.Taniguchi、ウィキペディア「ガレー船」より

～私たちの習った高校教科書ではこんなことを教えている～

アメリカ独立革命

イギリス領アメリカ植民地は、大農園制が広がる南部と、自営農民が多く、工業が発達した北東部などの地域差があったが、イギリス本国が課税を通じて統制を強めると、共に反発を強めることになる。1774年には大陸会議がひらかれ、翌年ついに独立戦争が勃発した。ジェファソンの起草した独立宣言では、人民の自由と平等、人民主権がうたわれ、ここに近代初の共和国が誕生する。1787年に制定された合衆国憲法によって、三権分立に基づく政治制度が樹立され、言論や信 教の自由も保障された。しかし、植民地時代から続く奴隷制は残されたために、自由と平等を掲げた共和国は出発点から矛盾を抱えることになる。また、土地を奪われることに抵抗する先住民との戦いも続けられた。

フランス革命

アメリカの独立戦争は、フランスに2つの衝撃を与えた。1つは、自由と平等を掲げた共和国の誕生が、ラファイエット（→フランスの改革派貴族で、アメリカ独立戦争に参加し、帰国後フランス革命を指導、人権宣言の起草にあたった。穏健な立憲王政派としてナポレオンに協力した）など、同じ理想を掲げる人たちを励ましたこと。もう1つは、植民地側に立って戦ったフランスの戦費がかさみ、財政難が悪化したことである。財政を立て直そうとするルイ16世は、それまで免税されていた貴族や聖職者に課税しようとするが、強い反発にあう。

1789年、ルイ16世が憲法制定を求める国民議会を解散させようとする、民衆はバスティーユ要塞を襲い、革命が始まった（→1789年7月14日、国民議会を支持したパリ市民が王国の武器庫を襲撃、フランス革命の発端となった）。その後、外国勢力と国王とのつながりを疑う革命側は、共和政の成立を宣言、1793年には国王を処刑する。これに衝撃を受けたヨーロッパ諸国は、イギリスを中心に第一次対仏同盟を結成して革命を封じ込めようとし、ヨーロッパ全域に戦争が広がることになった。

ナポレオンの台頭と没落

イタリア遠征やエジプト遠征で軍事的成功をおさめたナポレオンは、1799年に統領政府の第一統領に就任し、1804年には皇帝となってフランス革命に終止符を打った。その後も対仏大同盟（1799年、第二次が結成される）との戦いは続き、ナポレオンはイギリスを屈服させるために大陸封鎖令を出す、1812年にはロシア遠征に失敗し、1814年、パリは連合軍に占領された。翌年、ナポレオンは復活を狙うがワーテルローの戦いに敗れ、セントヘレナ島に流される。フランス革命からナポレオンの失脚にいたるまで、ヨーロッパを巻き込んだ争乱は、各地に大きな影響を与えた。絶対王政からの解放を歓迎した各地の人々は、やがて占領者としてのナポレオン軍に反発するようになる。他方、ナポレオン法典などの法制度や、人民主権、基本的人権などのフランス革命の理念は、ヨーロッパ各地に新たな革命の種をまくことになった。さらに、中米やカリブ海諸国にも革命の影響は及んだ。フランスの植民地であったハイチでは1791年に黒人奴隷の反乱が起こり、革命政府が奴隷解放を宣言するが、ナポレオンによって奴隷制が復活される。反発する奴隷たちは、1804年、フランスからの独立を宣言した。また、ベネズエラ、コロンビア、アルゼンチン、ボリビアなど南米諸国も、本国スペインがナポレオン軍の侵略を受ける中、次々と独立を果たした。